

第六節 糖業事情

一 農村の疲弊と沖永良部

昭和二年（一九二七）

昭和は深刻な不況で始まった。特に大島郡の黒糖は価格暴落のため絶望的状态となった。

この年の状況を「南島経済記」は次のように述べている。

「作れば作る程損になるのが今日の大島甘蔗である。製糖のために人を雇えば勿論大きな損となり、人を雇わずに自家労働を主としても矢張りその労働報酬は零になるものと覚悟せねばならぬ。これでは甘蔗に熱がなくなるのは当たり前である。七、八年前、黒糖の価格が今日のように低落しない時には生産高も十四、五万樽から十七、八万樽におよぶ盛況を見た折もあったのであるが、

その後だんだん減じて最近は十万樽から十一万樽見当、作付反別も減じて昭和二年十一月の最近の調査では四千七百六町歩ということになっている」

そのような中でも沖永良部は農業先進地への歩みを進めていた。再び「経済記」から引用しよう。

「昭和二年全郡で移入した肥料は豆粕・過燐酸その他で僅に七万四千三百円、その大半の三万三千七百円は和泊村で使用し、和泊は好い成績を挙げているのに他の村はこれに倣おうともせぬ。名物の台風があつて肥料を入れても益がないのだと弁ずるのもあるが所詮は耕作の無知を証するに外ならない」

この年、砂糖消費税が百斤につき二円から一円に引き下げられたことはせめてもの朗報といふべきであらうが、不況にあえぐ大島郡にとっては焼け石に水であった。

なお、特記すべきこととして、八月、天皇の奄美大島行幸があつた。このことが契機となつて大島郡の困窮が全国的に注目され、国・県がその救済に腰をあげるようになった。

二 糖業改良奨励費の交付

昭和三年（一九二八）

この年、政府から大島郡糖業改良奨励費約二十一万九千円（三年六月から四年二月までの分）が交付された。これは大島郡産業助成五カ年計画の一環をなすもので、砂糖消費税を免税する代わりに免税相当額を補助したものである。

その内訳の主なもの、甘蔗苗圃設置費・甘蔗灌漑設備奨励費・糖業改良奨励職員設置費・甘蔗病害虫駆除奨励費・共同製糖場設置奨励費等であるが、沖永良部島出身の県会議員沖元綱氏は、これを次の二点から批判している。

(一) 人件費が多く事業費が少ない。

(二) 沖繩県の糖業改良奨励費の内容をうのみにしたものである。沖繩県はこの奨励費の他に、肥料・畜産・養蚕・水産・工業・商業等各資金に恵まれている。したがつてこれらの資金に恵まれない大島郡の実際には適せぬ計画である。（「奄美」七月号）

三 小組合と婦人会

昭和四年（一九三九）

糖業に関してはもちろんのこと、和泊村の教育・産業生活面全般の向上発展を促してきたものに小組合と婦人の活動があり、これはしばしば他島から訪れた人々を感嘆せしめた。

このことを当時の「奄美」（六月号）の記事によって見ることしよう。

「大島糖業史に特筆さるべき共同製糖場 手々知名第一小組合の活動」 「大島郡糖業助成金に依って全郡和泊村手々知名第一報効農事小組合に共同製糖場が建設され組合員協力して、三月二日より製糖に着手し四月十八日全部の終了を見た。労力不足のため農村疲弊を訴えつつある際、この共同製糖場の創設は実に農村開発上適切な施設なりと政府及県当局の着眼に感謝すると共に、尚此の施設を年一年と増加計画して農村を救済されんことを絶叫するものである。」

「原動力は戸畑農工用小型石油発動機四馬力を使用し、圧搾機は吉岡式五輪車を使用しておるが、両機共故障少なく良成績を挙げ、従来の圧搾車で一日漸く黒糖一挺分（蔗量約千四百斤位）を搾汁して居たものが、本機では僅かに七十五分乃至八十分間に黒糖一挺分の蔗量を圧搾し、一日に七挺分蔗量約一万斤以上を搾る能率がある。

竈はロストル式にし三尺に六尺の角鍋と三尺径の丸鍋を二連装立とし、浅野煙筒を塗り立てあるを以て蔗汁一石四斗を僅かに二時間弱（従来の竈にては約四時間を要す）にて取上げられる。燃料ははかま（蔗葉）か搾茎を以て之に充てているが、搾茎の三分の二位は余す勘定になつて、燃料経済に於ても亦多大な利益がある。更に砂糖は精製して品質の向上を主眼とせるため特等品多く、この品質向上よりの利益も多大なものである。」

「製糖方法は着手前に抽籤を以て古蔗の順次を定め、新蔗は其の逆番を以てすることとし、機関士と製糖技術者は雇傭し、其他は全部組合員共同し、全く一家族の如く自他の区別なく焚夫一名、圧搾茎手一名、外回（蔗苗採取及蔗刈）二名は理事之を指名従事せしめる」

「由来本小組合は共同相助を主義として団欒せる組合

なるが、毎月陰曆十二日を例会日と定め、会員宅を輪番会場として、組合員全部出席して、知識の交換、農事経済其他一般の協議研究を重ねること既に二十有余年、其間約二百円を拠出して共同井戸の開削をなして飲料水の便を図り、約百九十円を拠出して学舎の建設をなして児童の奨学に力を傾注し、二千八百五十円（此内糖業助成金の補助あり）を投じて共同製糖場を建設して黒糖の奨励

及品位向上に努め、小組合員共同して村有林野の見締をなし、其他道路の改修改良、農具の共同購入、共同桑園の設置、稚蚕共同飼育を實行して能率増進を計り、共存共栄主義を徹底せんと努力しつつある」

なお同誌には農学博士石田研氏が沖永良部所見を次のように述べている。

「昭和四年の甘蔗植付面積六七町九反、之より二八三九二挺の黒糖を製造し、原料の歩留一割九厘に達し、本部各島中にしては歩留最も高く、其品質に於ても優良なる定評あり（「奄美」昭和六・新年号）」

昭和五年（一九三〇）

昭和四年、五年と大島郡の不況は深刻化していった。

この年、奄美各島を巡視した小林支庁長は次のような所見を述べている。

「沖永良部はいろいろな点で他に一頭地を抜いている。産業が合理的に発達し、教育も経済に結びつけて行われ、しかも精神教育もよく徹底している。特に和泊村は非常な努力を払い、これが着々高価に報いられている。元来なら赤土―小石交りの粘土であるが、それがどうしてこんなに立派になったのか。甘蔗・麦・百合などがのびのびと見事に榮えているのを見ると本当に感心する。百合を五反も六反もの広い畑に何万株といつて植えているが、その百合を一農家で千五百円も二千円も売上げているという状況である。これは連作を嫌うので外の作物を交替に作る。唐手を掘った跡によく肥料が運ばれているが、今度はそこに百合が植えられるそうだ。和泊村のある処で産業婦人会という十七八歳から五十歳位の婦人たちが百合畑に一行になつて草取りをやつていたが、この婦人会は荒地を借りて耕やし、百合の鱗片を蒔いて種子を作り、百合の共同作業をやっているのだという。外の畑でも十人位の屈強な男が活気よく働いていた。又、和泊手々知名の連合婦人会の作場を見たが、二反位の畑が

元は石原みたいな荒地であったのを借りて自ら開墾し百合根等を植え涙ぐましいほどの努力を払っている。こんなに和氣藹々の裡に勤勞精神がハッキリ現われ、笛吹けば直ちに踊るといふ形に人間の精神が生々している。共同製糖場もよく成績をあげている。到る処堆肥が行われ海藻がよく肥料に利用されている……〔奄美 四月号〕

昭和六年（一九三二）

「政府の糖業助成金によって出来た県立糖業講習所付属沖永良部島甘蔗原苗圃」和泊村大字内城所在一を見つめた。同圃主任本県農林技手今平市助氏は記者に語る。

県立の甘蔗原苗圃は名瀬町と伊仙村とこちらの三カ所にある。聖上行幸記念事業として昭和三年度に創設され、民間の畑地一町五反歩を買上げて苗圃・事務所・牛馬舎その他の施設をなし、創立費約一万二千円を要している。大茎種三反五畝、読谷山種三反五畝を栽培しているが何れもこの通りの繁茂ぶりで、台湾から移入した大茎種もよく此処の土地に適して成育がよい。これを苗に切つて永良部と与論に配付して蔗圃一町七反歩に栽培する……〔奄美 新年号その二〕

整備で郡民の生活救済・各島の基盤整備に大きな実績をあげた。（名瀬市誌）

十月、疲弊の極にあつた大島を市村知事が巡視したが、その際、次の投書があつた。

「大島本島の疲弊荒廃住民の無氣力に一驚しつつ、更に徳之島を経て沖永良部に行け。住民の活氣、道路の整頓、耕地の發達、人情の美、同日の論に非ず。南洲翁謫居の地に立ちその遺徳の大なるを偲べば低徊去るにしのびぬだろろう云々（鹿児島新聞一〇・二三）」

郡の砂糖樽については、従来何度かその改善が叫ばれたが、このころになつてもなお不徹底であつた。

「大島郡の黒糖は郡の主要物産として農家経済上の緊要なる位置にありながら、今日品質は向上せるに拘らず斤量は不統一にしてその包装容器に至つては原始的にして全く商品としての価値なく、荷造り粗悪により運搬中破壊したり又は容器汚損して貯蔵中に糖蜜漏出するなど商品をして取扱上不便を極め従て需要を阻害し価格低落し、斤量統一包装完全の沖繩糖に漸次圧迫され、大島黒糖は商品として非常な不利批難を受けていたので、大島支庁糖業係りではこの実情を当局に陳情して斤量統一包

「両村は例の百合根黒糖等の産額大島各島中第一に位しているため最も富裕と称せられ、旁々組合（大島信用販売）預金も総額二十七万余円中過半たる十六万円余は両村のものに属している……（鹿児島新聞六・二四）」

四 時局匡救事業

昭和七年（一九三二）

この年も国全体が不況下にあえいでいた。ましてわが大島郡は、失業した出稼ぎ者の帰郷、大島紬の下落による織工の失職、甘藷の不作等の問題をかかえてその窮乏は目を覆わせるものがあつた。鹿児島新聞（八・八）は大和・鎮西・実久・和泊・知名・与論・十島を除く名瀬町十三カ村（伊仙村は報告未着）で、甘藷さえ持参できない欠食児童が千五百四十五名にのぼっていることを報じている。

政府としては疲弊した農村対策のため、時局匡救事業を実施することになつた。対象となつたのは東北六県および大島郡と沖繩で、七年度から九年度までの三カ年実施された。主な内容は道路・港湾・河川・耕地の施設

装の大改善を計画したが、幸いに今日国庫の補助を得て一千個の秤器を給与されたので、去る一日大島郡砂糖同業組合總會を支庁楼上で開催し、

- 一、定量糖七十八疋としその未満は不合格
- 一、定量糖は蓆巻き六方掛腹掛繩上下二ヶ所を施す
- 一、定量糖は従来通り仕蓋四方掛とし正味量を明記すること

右の如く大島糖業界の一大改革を決議し来年出産糖からこれを実行することになつた（鹿児島新聞十二、十二）。

昭和八年（一九三三）

この年、市村知事が第二次として大島郡各島を巡視した。その際同行の記者は次のように述べている。

「富には恵まれないがどこか伸び／＼とした一つのユトリを残しているのが喜界島なら、開拓の緒につかず多少こせついているのが徳之島、既に開拓し尽し島村としての或程度のユートピアを建設し、今後は耕種方法の改善と農業の集約化に俟たねばならぬのが沖永良部島、位置本島の最南端に存在し交易極めて至難、今は只政治的救いの手をまつているのが与論島……（鹿児島新聞五・二

四]

税金・砂糖運賃の不合理についても目が向けられるようになつた。

「全県が挙つて大島を救え。政府は原案送達を待つてゐる。金井代議士の帰来談」として次の数字が述べられている。「大島の家屋税は十八錢三厘、全国平均四錢二厘、黒糖運賃はハワイ大阪間四十錢、台湾大阪間二十九錢、沖繩大阪間五十錢に對して大島大阪間は七十三錢。」(鹿兒島新聞六・十一)

この年の黒糖から、従来正味百三十斤(七十八キロ)であつたのを沖繩糖に合わせて正味百二十斤(七十二キロ)とし、樽胴部中央の包装用わらむしろに各島別に色別横線を入れるようにした。沖永良部は赤線であつた。(鹿兒島新聞十二・二十七)

五 大島郡振興計画

昭和十年(一九三五)

時局匡救事業が昭和九年度打ち切られたのに續いて、十年度から大島郡振興計画が実施されることになつた。

郡砂糖貯蔵庫建設補助規程を定める。糖業小組合補助規程を定め、戸数三十戸以上、糖業戸数五割を下らぬ組合を促進した。

大島・沖永良部を巡視した内藤県農事試験場長談「大島郡の産業助成は着々と成功、昭和五・六年に比べると現在は反当生産額に於ても全生産額に於ても殆んど倍に近い成績を示している。即ち樽数に就て云へば従来八万乃至十萬樽であつたのが現在二十萬樽に増加している。」(鹿兒島新聞二・五)

昭和十一年(一九三六)以降

昭和十一年以降、大島郡の糖業は順調に發展していった。特に十三、十四年期は二十一万余挺の生産を推定されるに至つた。これは振興計画の目標二十一萬挺を突破する数量でこの二十年來の記録である。

その原因としては、十二年から糖価が上昇し始め農家の意欲が出てきたこと、十三年は天候に恵まれたこと、大茎種が九十六パーセント程度普及したこと、肥培管理の技術が向上したことなどがあげられる。(鹿兒島新聞一四・一・一六)

期間は昭和十九年まで十年間、国・県費千九百四十八万余円の支出が予定されていた。

その内訳を金額の多いのから順に挙げると、土木費・産業費・土地改良費・航路改善費・教育費・保健施設費・大島支庁臨時職員費・通信施設改善費である。

産業費の内訳は産業振興費・経済更生費・農事費・糖業費・畜産費・工業費・水産費・林業費・蚕糸業費である。

大島郡振興計画は、従来の補助政策が単発、少額・短期間であつたのに對し、総合的で多額かつ長期間にわたるものであつたので郡民の期待は大きく、かつそれなりの効果をあげたのであるが、昭和十二年日華事変が起り、それが長期化し拡大していったため、予算の獲得が困難となり、計画の約三十六パーセントの実施に終わった。(名瀬市誌)

四月、県立糖業講習所を廃し、県農事試験場大島分場を置く。

七月、大島郡農業技術員設置奨励規程を定める。

十月、大島郡糖業技術員設置補助規程を定める。大島郡農産物病害虫駆除予防奨励金交付規程を定める。大島

しかし、十二年の日華事変以降、振興計画の予算は毎年度計画の四分の一度しか執行されず、産業振興も思うようにはかどらなかつた。男子青壮年の人手不足、特に砂糖運搬の船舶不足が深刻化していった。

参考文献 「鹿兒島新聞」(昭和二年～十四年)

「奄美大島」縮刷版 武山信夫(昭和五十八年刊)

「南島経済記」下田将美(昭和四年刊) 著者は昭

二 大島巡視毎日新聞経済部長